

鈴木さんの退職をお祝する

大 里 浩 秋

鈴木陽一さんがこの春定年退職された。職場を去る人に「熱烈に歓送します」と伝える中国語の言い方がある。去る人に「熱烈」を使うのはどうかという感じもするが、そこは中国語の積極的な意味合いをよしとして、鈴木さんの退職を熱烈に祝します。

一九八八年に中国語学科が開設されて三三年を経過して、その間に経験したことで忘れてしまったことが限りなくある中で、今でも思い出すことの出来る鈴木さんとの出会いの二、三を書きたい。

一つは初対面の時のこと。一九八六年秋と記憶するが、神奈川大学教師採用の面接試験に呼ばれて学校に出かけて、中国語担当以外の先生四人と共に経歴やら採用後の抱負やらを聞かれた時の主催者が鈴木さんだったのである。ところが、その席に三〇分は遅刻する失態を演じてしまった。約束の時間はもちろん頭に入っていたが、初めて学校に行くのにまったく備えが足りず、白楽駅からタクシーを拾うつもりがそこにはタクシーの乗り場はないので拾えないまま手間どり、歩くしかないと観念して汗だくでたどり着くことになったからである。おかげで、先生方に待ちぼうけを食らわせ鈴木さんには一番迷惑をかけることになった。内定状態の確認の意味での面接だったので助かったが、複数の候補者から選ぶ面接だったら落とされるところだった。世話の焼ける奴が仲間になると鈴木さんに思わせた

最初である。

二つは中国語学科開設前後の時のこと。無事神奈川大学に就職できて一年間は一般教養中国語の授業をいくつか担当しながら、先んじて学科開設の準備に関わってきた山口建治さんと鈴木さんの指導の下で、翌年から開始する学科の授業をどう分担するかなどの相談をして過ごしたのだが、その際にわかったことに、新入りの私と吉川良和さん（のち他大学に転任）の任務はその頃フランス語・ドイツ語・ロシア語など一般教養の外国語を担当する人たちの部会に所属しつつ中国語学科の仕事も分担するというものであった。つまり学科開設までは山口さんと鈴木さんが所属していた部会に二人が抜ける代わりに新入りの二人が入入ることだったのだが、単純に中国語学科に赴任するとばかり考えていた私にはそうした分担にはにわかに受け入れがたいものがあり、主には鈴木さんを相手にしばし議論を重ねることになった。私の言い分は、一般教養の中国語を担当しないというのではないが、可能な限り両方の担当をみんなで分担すれば済むのではないか、というものだった。しかしすでに私なぞが関わって議論する以前に学内でそう決まっていたことで、鈴木さんはそうした既定の方針に基づいて議論の相手をしてくれたことになる。その後、この件がどうなったかといえば、学生が毎年一学年ずつ増えることで四年経って学生が満タンになった頃には教える側も実際に見合った分担をせざるを得ないことになっていき、一般教養外語部会に顔を出す仕事はしばらく続いたものの、他大学での豊富な実績により請われて就任された那須清（言語）、小島晋治（歴史）、尾上兼英（文学）三長老先生を例外として一般教養の中国語を均等に担当することになっていった。物分かりの悪い私は事情が分からないまましやにむに鈴木さんと山口さんを困らせたことになる。

ところで、学科での議論ということで言えば、鈴木さんは私の退職記念をうたった六年前の本誌（No. 185）に寄稿して下さり、「（創設以来次第

に) 中国語学科の教員の考え方の違いも目立ってくる。乱暴にまとめてしまえば、学生を勉強させるよう、どのように巧みに或いは厳しく管理していくのかという方法をめぐっていろいろ議論してきた。……容易に意見はまとまらないのだが、我々のいいところは、そうした議論を堂々と公明正大に行ってきたところだ」と書いておられる。今となっちはいつどんな議論をしたかは思い出せないものの、鈴木さんが書かれているように率直に自分の考えを言い合ったことは確かで、議論の後にはお互いの考えの違いを超えて協力にむかうことができたのは何よりだった。

三つに、学科開設2年目に中国で学生を中心に共産党政府に民主化を求める運動があり、政府が軍隊を出動させてそれを鎮圧した時のこと。天安門事件と称されて世界中に非難の声が起り、学科でも軍による鎮圧をあってはならないことだと批判するとともに、この事件の影響で入る学生がいなくなるのではと心配した時のこと。日頃ほんやり過ごして素早く行動することがない私が、この時は民主化の声を上げた中国人留学生を支援して他大学の研究者と一緒にカンパ活動をししたりしたが、そうした動きを見て鈴木さんを始め同僚の人達が支持してくれたのは心強いことであった。

他には、鈴木さんをずっとうらやましく思い、かつ感謝していたこと。秋田の田舎で生まれ育った鈍重な私にとって、東京育ちで頭の回転の速い鈴木さんの存在はまねできないもので、学科を代表してあいさつする時の見事さにはいつも感心していた。また、学内外の各種情報に通じていて、学科として何らかの方針を決める必要がある際に大いに力を発揮して下さった。おかげで、人前に出ることが苦手な私ではあるが、学生や学外の人を対象に日中間の懸案になっている戦後処理の問題を中心に講演会や映画会を開催することで、学科内でのそれなりの任務分担ができていたのではないかと今でも思っている次第。

前述の三長老のうち那須先生は早くに亡くなり、小島、尾上両先生はともに二〇一七年に亡くなった。そして、鈴木さんと共に創立準備から長いこと学科の発展に尽力されてきた山口さんは一七年春に退職し、二〇年暮れに亡くなった。鈴木さんには、健康に十分留意されて今後とも研究に励んでいただくとともに、中国語学科のさらなる発展の導き手になっていただきたいと願っている。